

日本書紀傳

廿二卷三

和書
一〇五二號

二十

内閣文庫		
番號	和	10522
冊數	156(77)	
函號	特 85	1

内閣文庫



六十一

消
文
庫

何
庫

云二十
九丁和
我勢故
之可久
志伎許
散婆安
米都

知可未
字許比
能美奈
我久等
曾於毛
布あこ
有て

何庫
一向小
神願奉
るを云
あり然
以能年
ハ

漢文の語末の辞小而已又耳字を此小能美々訓玉其
小等しく唯其神小而已一向ある意を示奉りて事
を乞ふ是あり飲蒸呑啣あどの字を能年々訓む然
門の義かて唯一條和名抄の咽喉和名乃無止と有と吞
て祈を能年々云も等曲撲玉事無く行通る謂ある小
年々訓るハ上七十一丁己ハ引る周礼ハ
九辨之初辨也屈首至地也マ有る是あり
コノトキ初辨也カミキコメニテリテ

于時日神聞史曰頃者人雖

〇日本書紀傳二十二

〇百二十一

多請未有若此言之麗美者
也乃細閑磐戸而窺之是時
天神力雄神侍磐戸則引閑
之者日神之光滿於六合故
諸神大喜即科素交鳴尊十

座置戸之解除以手爪為吉
爪棄物以足爪為凶爪棄物
乃使天兒屋命掌其解除之
太諄辭而宜之焉世人慎收
已爪者此其緣也既而諸神

嘖素戔嗚尊曰汝所行甚無

頼故不可住於天上亦不可

居於葦原中國宜急適於底

根之國乃共逐降去

天照坐日太御神天磐戸を開て刺隠り御在り坐ける
時の八百萬千萬神共此小神集ひ給ひて祈

禱申さぬける其感けさせ御在り坐て出させ給へ

り御事ハ一も天兒屋命天太玉命の廣厚き稱辭を
聞食し感させ給へる又天鈿女命の俳優を怪し

せ御在り坐て磐戸を細め開て見行し御在り坐し
依て豫め其用心し給へるか如く天子カ雄神ハ御戸

を開き奉り拵嘴午ニ姫命亦名天鈿女命ハ一も御子を賜ひ
りて引出し奉りて新殿ハ遷座奉り天兒屋命天太玉

命ハ端出之繩を界以て此より以内ハ勿還幸り申
せる是れ一段あり然るハ正書ハハ中臣連遠祖天

兒屋命忌部遠祖太玉命云ニ相共致其祈禱焉又猿女

君遠祖天鈿女命云々顯神明之憑談是時天照太神聞
之而曰吾比閉居石窟謂當豐葦原中国必為長夜云何
天鈿女命噫樂如此者予乃以御宇細開磐戶窺之有
て此みて其俳優み之感けさせ御在し坐ける起
りて稱辭の驗ハ見えす又古事記みも此種ニ物者布
刀玉命布刀御幣登取持而天兒屋命布刀詔戸言禱白
而云々天宇受賣命云々為神懸而掛出胸乳裳緒忍垂
於葦登也尔高天原動而八百萬神共咲於是天照太御
神以為怪細開天石屋戸内告者因吾隱坐而以為天原
自聞亦葦原中国皆聞其何由以天宇受賣者為樂亦八

百萬神諸咲尔天宇受賣自言益汝命而貴神坐故歡喜
咲樂如此言之間天兒屋命布刀玉命指出其鏡示奉天
照太御之時天照太御神逾思高而稍自戸出而臨坐之
時其所隱立之天予刀男神取其御宇引出有ハ此ハ
甚々委曲みして愛たき事共み多右りけるを猶其
稱辭を聞食して大御心感させ御在し坐ける御事を
漏せざるを甚可惜しき事ありける拾遺みも其物既
捧持稱讚亦令天兒屋命相副祈禱又令天鈿女命云々
結ハ無くして廣厚稱詞の事を委しく云ふが其事の
悉く群神何由如此之歌舞聊開戸而窺之有ハ右
同トく聞ゆる事あり又第一一書みハ此諸皆未集時
足ハて聞ゆる事あり

中臣遠祖天兒屋命則以神祝^祝之於是日神開磐戸而出焉^略有ハ其祢辞ハ感けさせ給ひて出坐る趣ハ
てハ有れども天鈿女命の俳優の御事をハ傳へ遺さ
れたり此傳ハも諸神造中臣連遠祖興台立産靈見天兒
屋命而使祈焉於是天兒屋命握天香山之眞坂不而云
ニ乃使忌部首遠祖太玉命執取而廣厚祢辞祈啓其于
時日神聞之曰頃者人^雖多請未有若此言之麗美者也
乃細^開磐戸而窺之^略有て天鈿女命の御事ハ於て
ハ少^うも見^る所無^くハ有^る也^ハ又下^り辨^へたりガ
如^く右の廣厚祢辞ハも天兒屋命ハ其御祈禱の大

祝詞を申させ給ひける事ハ右ハ引る古事記ハも天
兒屋命布刀詔戸言禱白而之有^りて灼然^く又太玉命
ハ其執取せる御幣ハ就て祢辞竟させ御在^り坐^し事
唯拾遺^ハの之傳ハりて此ハ何^れハも漏せる^ハ也
事實^ハ於て相叶ふ^ハト^ク聞^ゆめる^ハ但^レ主張^て其
ハ天兒屋命の本^ハ知^りて任^じ奉^給ふ事^ハ也^ハ太玉命^ハ
ハ唯其祢辞^ハの事^ハ有^りけ^る者^ハ也^ハ有^りたり^ハ也^ハ
ハ^ハ傳^ハ十九^ハ四^ハ百^ハ五^ハ論^ハつ^るへ^る事^ハ有^るを今^ハ少^ク取
出^て云^ふハ右^ハ正書^ハの文^ハ経緯^ハの差^有る^ハ其^ハを^知て
思^ひ分^けべき捷徑^ハ有^りける^ハ其^ハ中^ハ臣連遠祖天兒屋
命忌部遠祖太玉命相^ニ共^ニ致^し其^ハ祈禱^ハ焉^ハ有^り此^ハハ甚^ク

主^ハしき事あり有けり^ハ文の経あり者あり又孫女
君遠祖天鈿女命云々有^ハ又別の一^ハ事ありが故に
又字を置^ハりたる^ハ文の緯あり有^ハけり其事の続き
に依^テて出^サせ御在^シ坐^シ如^ク見ゆる事あり^ト其
唯中間に狭^キたり事あり有^ハけり其優^ニたる^ハ感
けさせ給^ハし程の御事あり^ハ況^テ其廣厚き^ハ辭を
も聞者す坐^マ云理無^キハ彼文の如^クあり^トも其二事
に相感^ケさせ御在^シ坐^シ趣^ルる^ハ玉見ゆる可^クなり
然^ルハ^ハ此^ハ干^ノ時日神聞^之曰^ク頃者人^雖多^ク請^未有^者此
言之麗美者也乃細^ニ聞^ル磐^ノ戸^而窺^之と有^ル文を続け^テ読

て心得べき所あり者あり次あり又孫女君遠祖天鈿
女命云々古事記に於是天照太御神以^テ為^シ怪^ト細^ニ聞^ル天
石屋戸而内告者云々此係合^セ心得べき文あり^ト取
惣^テ云時ハ先^ニ其廣厚^キ辭^ヲ祈^テ啓^セる^ハ言の麗美^ニき^ハ
愛^サせ御在^シ坐^シて先^ニ磐^ノ戸^ヲ細^ニ聞^ルせ給^ハし其事
の因^ニて天鈿女命と御問^對の御事、御在^シ坐^シける
あり^ハ先^ニ祝^詞あり^ト大御心感^ケさせ給^ハし神樂あり^ト大
御心樂^ニおせ給^ハして終^ニに磐^ノ戸^ヲ隱^ルせ御在^シ坐^シ難^キ
勢^ハ成^ルる^ハあむ即思^ハ兼^テ神の思^ハ謀^ハの遠^ク及^ベる^ハあり
有^ハべ^クなり^ト師^ノ古^史第^五十^六段^ニ徴^キ或^ハ又^ハ問^ハ此^段
天^皇屋^命の祝^詞に宇^受賣^命の御^優と

小感坐して出御御趣の記せ事如何の思ゆ云こ
云了答の古事記の天兒屋命布力詔戸言禱白而の
之有て其祝詞の感給へる事を記さる事の禱白而
云二天宇力男神云二天宇受賣命云二八百万神共咲
於是天照太御神以爲怪云二移り行べき文章の氣
勢の引以て其太祝詞の感給へる事ハ言漏されたる
者ありと云れたる如く又右の第二一書と此の天兒
何れも然る事あり屋命の二稱辭竟奉る一趣めて有れども已れ正書
の相典致其祈禱爲る云ふ證文有る古語拾遺の宜令
大玉神牽諸部神造和幣云二其物既備云二令大玉命
捧持稱讚亦令天兒屋命相副祈禱之所見たる稱讚を
保米麻表須と訓たる其事を儲備既畢具如所謀尔
乃大玉命以換厚稱詞啓日吾之所捧宝鏡明麗恰如汝

命之開戸而御覽焉有了十八字の文此の當田水り此
ハ壽詞の類の一て太御幣と取持せる物ハ就て稱讚
せるあり又右の亦令天兒屋命相副祈禱有る大玉
命を一て太御幣を捧持しめ其物ハ附副て御祈の言
を申させ給へる事神祇令れ其祈年朋次祭者百官
集神祇官中臣宣祝詞忌部班幣帛と見え又九踐祚之
日中臣奏天神之壽詞忌部上神璽之鏡劔と有る中臣
の狀ありけるを拾遺の其下ハ仍大玉命天兒屋命共
致其祈禱爲る有て大玉命を正す一天兒屋命を副す
為る趣ありハ少く私有る事ありが其ハ御紀の傳二

の唯天兒屋命のこ有^{其事}太玉命の御事を書さねばざる
 を憤^{其事}ちり^{其事}の故あり可^{其事}但天兒屋命ハ其御祈禱の
 太祝詞を申させ給ひ太玉命ハ賛^{ホメコト}辞を申させ給へる
 ろ^{其事}の相共致^{其事}其祈禱鳥^{其事}と有るも其差別無^{其事}しとハ
 云べう^{其事}さるも也又此ハ天兒屋命より係りて廣厚
 称辞祈啓矣と有る右の拾遺^{右ノ謂ヨリ}ハ以廣厚称詞啓曰と所
 見た^{其事}ハ二神共^{其事}其^{其事}稱讚を申給ひけむ^{其事}とも所思
 ゆ^{其事}の中^{其事}其壽詞を述^{其事}ると祝詞を申さる^{其事}こととの差別
 ハ有^{其事}けめ^{其事}とも大旨一事^{其事}然云故ハ古事記^{其事}如此言
 之間天兒屋命布力玉命指出其鏡示奉天照太御神と

有を以思ふ^{其事}の同時^{其事}の同事を成す^{其事}の言を換て申上べ
 き謂^{其事}無^{其事}以^{其事}あり傳十九^{四百六}拾遺の文を引て
 説^{其事}る事共を合せ考ふ可^{其事}但記傳八卷四十七丁^{其事}古
 護^{其事}立^{其事}令^{其事}天兒屋命相副祈禱^{其事}又神武天皇殿^{其事}ハ立^{其事}靈^{其事}時^{其事}於
 鳥見^{其事}山中^{其事}天富命陳幣^{其事}祝詞^{其事}禮^{其事}祀^{其事}皇^{其事}天^{其事}之^{其事}布^{其事}幣^{其事}を陳^{其事}以^{其事}事
 あり^{其事}の^{其事}云^{其事}の^{其事}祝^{其事}詞^{其事}を^{其事}申^{其事}給^{其事}ひ^{其事}け^{其事}む^{其事}とも所思
 式^{其事}ハ^{其事}祭^{其事}祝^{其事}詞^{其事}者^{其事}御^{其事}殿^{其事}御^{其事}門^{其事}等^{其事}祭^{其事}府^{其事}部^{其事}氏^{其事}祝^{其事}詞^{其事}以^{其事}外^{其事}諸^{其事}詞
 祭^{其事}中^{其事}臣^{其事}氏^{其事}祝^{其事}詞^{其事}と^{其事}有^{其事}る^{其事}事^{其事}あり^{其事}其^{其事}大^{其事}殿^{其事}祭^{其事}御^{其事}門^{其事}祭^{其事}等^{其事}詞
 壽^{其事}詞^{其事}の^{其事}類^{其事}ハ^{其事}自^{其事}余^{其事}の^{其事}詞^{其事}と^{其事}○于^{其事}時^{其事}より^{其事}以下^{其事}
 同^{其事}ト^{其事}る^{其事}も^{其事}心^{其事}を^{其事}着^{其事}べ^{其事}し^{其事}○于^{其事}時^{其事}より^{其事}以下^{其事}
 三十一字を口訣^{其事}の感應之辞也と註せ^{其事}る^{其事}ハ^{其事}於^{其事}事^{其事}ハ
 て實^{其事}然^{其事}る^{其事}言^{其事}あり^{其事}○聞^{其事}之^{其事}ハ^{其事}正^{其事}書^{其事}ハ^{其事}是^{其事}時^{其事}天^{其事}照^{其事}太^{其事}神^{其事}聞
 之^{其事}而^{其事}曰^{其事}と^{其事}有^{其事}ハ^{其事}同^{其事}ト^{其事}此^{其事}言^{其事}ハ^{其事}己^{其事}ハ^{其事}傳^{其事}十^{其事}四^{其事}八^{其事}丁^{其事}ハ^{其事}云^{其事}り^{其事}き

今方葉の八評の
項者之朝宗不聞
者又評意項者
あざ此裡見の

楯

○曰を正書あるも此あるも共の意母富佐久と訓了
事ありども己の御言の祭し出させ給へる上ハ能理
多麻波久と訓て當れる事傳十九四百六十八の云る如
し○項者の例も傳十九四百六十八の引り此字文選注ハ
項者猶日者又近也と有りの人ハ神の反對ある事云
も更あり神ハ隱身お就て云ひ人ハ顯身お依て
号けたる稱あり有ければ精神ある方ハ神ありて形
体有ハ人ありけり厭乞先ハ神と云事を明るめ置て
後ハ人と云義ハ説べきあり古事記ハ天地初祭之時
於高天原成神名天之御中主神次高御產巢日神次神

產巢日神此王柱神者並獨神成坐而隱身也と所見た
る此文を以て神と申す事ハ較略を曉る可き由あり
有ける此高天原を古語拾遺ハ天中と有て此神代
章ハ謂ゆる虚中是あり其所ハ天之御中主神の御在
し坐るハ即御靈ありて顯身あり坐ざる故ハ隱身也
と傳へて此世の涯際の主宰と御在し坐て此神の外
ハ物無く此神の外ハ神無ければ此天之御中主神ハ
しも此世の極際を形体と成して此世中ハ充滿せさ
御在し坐す御靈あり御在し坐ける若て其天之御
中主神の天地を立給ハむと所思し坐御靈あり高

御産巢日神ニ産巢日神ニ柱神成出させ御在り坐て
 天中在り精を結合させ御在り坐て天地成へ
 き一物を成し出させ御在り坐し其も唯御靈
 の御在り坐ける故に此神等をも隱身也と傳
 へたり又其一物成就て神成坐り古事記の次國維如
 浮脂而久羅下那洲多陀用幣疏之時如葦牙因萌騰之
 物而成神名宇麻志阿斯訶備比古遲神次天之常立神
 此二柱神亦獨神成坐而隱身也上件五柱神者別天神
 と所見たる此ハ葦牙の如く萌騰^騰る物と其物の結合
 て天と成り各其物其事を初給ひ成給ふ神ハ御

△此の如く此を證言
 して云ふ聖皇御記の
 僧行基を稱へば
 語に於日本國是化
 身聖也隱身之聖
 矣と云ふ乎城朝の
 俗語を以て云ふ所
 在る物の隱身ハ
 形を爲す云ふ
 隱身と云ハ顯身
 有りて有り者の神
 ハ顯身在り謂ひて
 右等の義を説いた
 小引有れば恐けれ
 ども今引出せ此ハ
 聖人交り中と云ふ
 隱身ハ顯身と云ふ
 中其顯身ハ謂ひ
 云ふ者有り又聖
 徳皇太子示長孫
 の傳ハ誠聖人知
 聖人聖人之通眼
 見隱身と云ふ事
 有て天服小通ずれ
 ば隱身の神を以
 る由云ふ者

在り坐せども此亦御靈の有りて御形体を顯し御
 在り坐さるが故に隱身也と傳へたるあり有け
 る然れども其高御産巢日神^神産巢日神^神あり時ニ
 出現させ御在り坐て諸神と共に萬事を神議し
 議し御在り坐し又御子神等をも成し給へる顯
 身と成て物為させ給へる御事少く御在り坐ける
 り然りも雖も此神等ハ元より隱身ハ御在り坐す
 り本體ありて渡り給ふが故に事無く徒あり時ハ
 顯し給ふ御事ハ坐り又右に謂ひる産巢日神^神御
 余の天神ハ分ちて別天神と申す其外郭ある恒天と云
 光の及ぶ限ハ唯の天ありて其外郭ある恒天と云
 を係て九て別天と云稱ある事若て右に國維有
 己の傳三卷三十七丁の云々なり

○日本書紀傳二二
 ○百三十

る因ハ旋^ル上^ニ云事少^クて浮膏^ノ若^クして漂蕩^ヘる物
の稱^{アリ}を古事記^ハ次成神^名国之常立神^次豊雲野
神^此二柱神^亦獨神^成坐而隱身也^有其国常立尊
ハ大地を旋轉^スして^{公運云}事を成^ス神^{あり}豊雲野神^を此
神^世七代章^{第一}一書^ハ豊国主尊^有豊国^ハ地
動^ノ謂^ハて其公運^ハ對^ヘて私運^を成^ス神^ハ曆^元を
立^サせ御在^シ坐^ス神^ハ坐^ル此^ハ大地^ハ住^ム者^年月
の束^経を思^エ晝^夜の行^交を^知事^{あり}も誰^ク
成^スと^ハ知^ズして自然^ノ如^ク思^ハゆるも幽^ハ然^ル神
の御在^シ坐^テ然^為させ給^ハ御事^{あり}あり神代^ノ神

等^ハ然^ル隱身^也云神^を其行事^を見^タり知^ラ
り甚^明く御在^シ坐^ケる^ハ然^ル神語^ノ傳^ハ有^リ
ありけり若^ク右^ノ二神^ハ次^名宇^比地^迹神^次妹^須比
智^迹神^次角^杵神^次妹^活杵^神次^意富^斗能^地神^次妹^大
斗^乃辨^神次^於母^陀琉^神次^妹阿^夜訶^志古^泥神^次伊^邪
那^岐神^次妹^伊邪^那美^神と有^テ後^ハ次^雙十^神各^合二
神^云一代^也と所^見た^ル上^ノ八^神ハ別^神ハ坐^ズ伊^邪
那^岐神^伊邪^那美^神の此^大地^と共^ハ御^靈の成^出させ
御在^シ坐^テ元^ノ隱身^{より}顯身^と生^出させ給^ハまで
国土^ハ成^行く^ハ連^テ御身^ノ足^整させ御在^シ坐^ル其

今本記の大倭本紀云
 國常立尊國魂神
 伊弉諾伊弉册此
 神獨治身藏矣
 委土者大尊大
 之直公尊面足尊
 伊弉諾公尊此四
 神共治身藏云
 之と有て上の三
 神の獨治身藏
 矣と有ハ然事
 本れともは神の
 共治身藏と云ハ
 古事記の此の真
 事なりけれハ推量
 の言ハ六なり

時この形状の依て肩坐る御名あるを一世二世之教
 へ奉りし御名ありハ漸く隱身より顯身の移りせ給
 ふ所あり此を以て此神等ハ隱身也とい書され其
 しき事ハ傳五卷四丁の註に就て見べし右等の神
 等の隱身也とも何とも書れざるハ右の如き所以有
 る故あり其論長けれハ若て伊弉那岐神伊弉那美神
 此の云盡し難りハ若て伊弉那岐神伊弉那美神
 の御事を其次文ハ於是天神諸命以詔伊弉那岐命伊
 弉那美命二種神修理國成是多佗用幣流之國賜天沼
 矛而言依賜也之所見たる此ハ隱身の御在し坐け
 時之顯身の成りせ給へる時との界を見べき所あり
 云有ける其ハ右の十神の御名を並擧りたる中ハ

ハ伊弉那岐神伊弉那美神と書されたるハ其成出さ
 せ御在し坐し始りて未天神の御事依しを受賜り
 せ給はりし程ある故ハ神と申し此のハ己ハ其
 御言を持せ給へるが故ハ命と申せし事傳三十八丁ハ
 註に如し偕其神と申し程ハ隱身の御在し坐し
 又此ハ命と申せしあり顯身と生出させ給へるあり
 其證ハ其次ハ於是尙其妹伊弉那美命曰汝身者如何
 成答曰吾身者成ニ不成合處一處在尔伊弉那岐命詔
 我身者成ニ而成餘處刺塞汝身不成合處而以為生成
 国土奈何伊弉那美命答曰然善と有る此ハ二柱神初

て御形体の出来させ御在し坐ける所ある故の男神
の御方ありても御自御身ありし處り成出たるを
以て女神の御身あり然る御事の御在し坐ずや如何
ありと云ふ御問對り御在し坐けるあり是を世中の
顯身と云ふ事の出来成ゆる初ありける此れは差異を
立る時ハ天之御中主神以下^國豊雲野神以上ハ隱身
の御在し坐せば謂ゆる神あり若て二柱御祖神ハ此
の始て顯身と成りさせせ御在し坐せば人の始と
申す可き状あり所以ハ^水蛭子淡島を生給ひける御時
の文ハ今吾所生之子不良猶宜白天神之御所即共參

上請天神之命亦天神之命以布斗麻迹尔ト相而詔之
因女先言而不良亦還降改言と所見たる此ハ二柱神
ハ己ハ顯身と成りさせせ御在し坐る故ハ隱身ありて
渡りせ給へる天神ハ御直ハ御言語の御事出来させ
給はざるを以て太古以て御命を請奉りせ給へる
其兆ハ現れたるあり即天神の御言ハ有ける然る
世七代章第ニ一書ハ天地混成之時始有神人焉と
有る神人を^如微と訓し其訓ハ且^神神人との
字ハ僻事あり斯^隱隱身の神等ハ人^體體を以て書さる
事^實實ハ^熟熟字の有りて被用たり者ハ^深深
く思ハれ^微微し者あり^此此れハ^御御紀を以て^化化して
の事共を^微微し^唯唯古傳の任^甚甚目^諸諸二柱御祖神
ハ古事記の方ハ^唯唯古傳の任^甚甚目^諸諸二柱御祖神
易を以て多く其文ハ^隨隨ひて^説説るあり

の生成し奉りて給へる御子神等、天照太神素戔嗚
尊を始奉りて八百萬神（と）等悉く顯身の神の御在し
坐ありあり一々一人一人云々皆神と稱奉る事、
も如何と云ぬ（世の始行任せて神と申奉る）彼天之御中主神一柱のこゝに御在し
坐しを其御靈を分て高皇產靈神神皇產靈神と成出
させ御在し坐ける（世）世の中（中）に在し有りたる八百萬千
萬神、其皇產靈の御靈より生出させ給へり、其よ
り及わしと皆共の神と申奉る事、申すも更なるか
況て天照太神（一）も天之御中主神も御身を合せ
て一柱の如く御在し坐へき幽契有て其御祖と坐す

高皇產靈神皇產靈二神と雖も猶御前の御事を執持
せ御在し坐て輔相奉りて給ふ許の上無く至尊天皇
太御神の大座にて其大御元の及ふ限り天地の底際
の内、其大御徳克徹し御在し坐せば神と神と
稱奉る可き御事あり合せて自餘の諸神も神と
申す、其神々の各々奇異ある御徳を有らせ御在し
坐か故あり此より出て靈しく奇しく測知するまじ
きもの業も人尊とて其徳の大あるもの神と申し
然るゆゑも（眼）前人の對へて、幽りて世の形体の見
え難きもの神と申す事常あり（其の人ハ形体ハ限有
りて其思ふ所も成す）

事も大抵の限の有て測知る可きを神の隱身を本
為る事故の尋常の小智を以て推量り知らざる
者ある事今云然れば世中の皆がく神ありし神代
も尊業あへたる方あり神と申し又我より疑はむ
あり非れども尋常ありて他神の上を宣ふあり神人
と有り此の已の正書ゆ干時八十萬神會合於天安河
邊計其可禱之方と見え第一一書ゆ故會八十萬神於
天高市而問之とも此一書ゆも上の諸神遣云二天兒
屋命而使祈焉とも有り有り諸神神集ひて祈申さ
しけりを干時日神聞之曰頃者人虽多請云と有り
天照太神よりハ其八百萬神を指て人と詔給へり又

此御返さし古事記の天照太御神の何由以天宇受
賣者為樂亦八百萬神諸咲と詔給へる天宇受賣命の
御答ゆ益汝命而貴神坐故歡喜咲樂と有か如く崇へ
尊奉ゆり然神と申奉ゆを以て知へし右等ハ
同ト神代の神等どちの御上りても然る差異の有つ
て證ある者ありけり又其天照太神より以後の神代
一世七代と云稱あり有けむと思ふも今世人世と
分たるとあり有へるごめぬとも其意味ハ崇の尊と
と聞ゆ事又神名も四神出生章第十一書ハ泉守道
者其第十一書ハ天熊人有天孫降臨章第四一書の
天忍日命を姓氏録ハ天押人命と有り又万葉六十二

日本書紀傳二十二
〇百三十五

空劍說章第
 六書初大已貴
 神之子國也行動出
 雲國五子授之也訂
 而且當勸食是時
 海上忽有入聲驚
 而承之都無所見
 項時有二箇女男
 此即大乃名命是
 也其有之古事記
 也自波羅乘天之
 羅羅之船云有婦
 夫神云云有之
 人傳りて現出せし
 給ふ事ある故又
 色之事を云ふ
 又

八の天尔座月説壯子ヲ詠ヲを其十六丁の日人壯
 有て即日夜見尊の渡ヲせ給へる多々仁て右等小
 人之有ハ顯身身御在し坐を以る古事記海宮段小
 火遠理命の御事を尔海神之女豊玉毘賣之從婢持玉
 器將酌水之時於井有光仰見者有麗壯夫略故璣璣任著
 以進豊玉毘賣命尔見其璣問婢曰若人有門外哉答曰
 有人坐我井上香木之上甚麗壯夫也益我王而甚貴故
 其人乞水故奉水者略尔豊玉毘賣命思奇出見乃見惑
 目合而白其父曰吾門有麗人尔海神自出見云此人者
 天津日高之御子虚空津日高與矣之有る此ハ其御形也

御事を委曲の述了所ある故尔人々申せざるを唯小
 御上を申すハ天孫神御子之申奉り御紀ハ天孫
 作らたり是あり又右の御事と同ト状ある所ハ
 隨詔命而参到須佐之男命之御所者其女須勢理毘賣
 出見而告此者謂之葦原色許男即喚入而令寢其蛇室
 云ニ有て彼ハ麗人ト坐セバ同ト書さる可きを唯
 小顯身の神ハ御在し麗人ト坐セバ同ト書さる可きを唯
 古傳の任ハ麗人ト坐セバ同ト書さる可きを唯
 神亦為宇都志国玉神云ニ有る事ハ係り其御功
 事を云所ある故ハ此又四神出生章第六一書ハ泉津
 醜女八人々有る八人を夜都比登之訓ニ又其千頭千
 五百頭を古事記ハ伊邪那美命言愛我那勢命為如

此者汝国之人草一日絞殺千頭尔伊邪那一岐命詔愛
我那迹妹命汝等然者吾一日立千五百產屋是以一日
必千人死一日必千五百人生也又有神の御言ひ千
頭千五百產屋之言舉世給ひ又其依て千人死千五百人生
るに誘ひ此れ起りるる此れ神代にて顯身を指てハ
人々云りし事知べし又其時挑み告給へし御言ひ汝
如助吾於葦原中国所有宇都志伎青人草之落苦瀬而
患惚時可助見元四神出生章第十一書有る種物
の出来來所子時乃天照太神喜之日是物者則顯見蒼生
可食而活之也々有る下小顯見蒼生此云宇都志枳阿

鳥比等久佐と活て神等の上より顯身と生出たる人
の事を然宜給ふ定るが如し其事委しくハ傳十四
百五十カ已カ詳明の説たりき出雲風土記カ神門郡
九下カ命之時以日洲河築造也之尔時古志国人等到來
而為堤即宿居之處故云古志之云事と所見たり當昔
已カ常々人々云若て天孫降臨章第二一書小高皇產
靈尊乃還遣二神勅大已貴神曰今者聞汝所言深有其
理故更修二而勅之夫汝所治顯露之事宜是吾孫治之
汝則可以治神事又汝應在天日隅宮者今當供造略於
是大已貴神報曰天神勅教慇懃如此敢不從命乎吾所
治顯露事者皇孫當治吾將退治凶事略々有て下小顯

此云阿羅幡武々注せる武ハ辞あるを混れたるありて
顕露ハ阿羅幡あり此ハ古史等百二十二段徴小現津
小幽事神事小顯露事と相對ハ語あり云々 借其
事を出雲神壽詞ハ国作之大神子媚鎮天大八島国現
事顯事令事避支乃大穴持命乃申給久云ニ皇孫命能
近守神登貢置天八百丹杵築宮尔靜坐支有ハ其旁
を省きたる者ありて八百丹杵築宮尔靜坐其神事幽事
知食支々云意あり若て其御契約の御事御在し坐て
百不足之八十隈ハ隱給ひありハ今迄顯身ありて御
在し坐し大神を天日隅宮ハ祭祀奉る事と成て後ハ

天神の御子カ天降らせ御在し坐て幽と顯と相交代
て全く今の現世マハ成りけるハ大国主神ハ国神
を率めて皇御孫尊を護奉らせ給ひ大地官を治させ
御在し坐す是神事あり又皇御孫尊ハ顯露事所知食
させ御在し坐すハ相並ハハ一人の上の善惡ハ就て
各治めさせ給ふ道有る是幽事あり有ける其一書
歸順之者渠者大物主神事代主神乃合八十萬神於天
高市帥以昇天陳其誠歎之至時高皇產靈尊勅大物主
神立領八十萬神永爲皇孫奉護之乃使還降之見元
垂仁天皇二十五年御紀云の載たり大倭大神
の御言ハ大初之時日天照太神恙治天原皇御孫尊
專治葦原中国之八十魂神我觀治大地官者有あり
何れも神幽あり然して高天原より皇御孫尊を天降
事共ありて有あり

一奉る世給ひて其現事顯露事を如所_レ知し坐しめ
奉る世給ひけり統紀第一詔の高天原_ル事始而遠天
皇祖御世中今至_ル天皇御子之阿礼坐_ル年弥継ニ_ル
大八島所知次止天都神乃御子隨母天坐神之依之奉
之隨聞着来此天津日嗣高御座之業止現御神止大八
島国所知倭根子天皇命云々云古語の有_レ就て考
ふる_レ己_レの大国主神_ハ幽冥_ニ入_リて御在_シ坐
てより全く顯身_ノ人の世_ニも成_リけりけり其高
天原より天降り来坐_リ皇御孫尊を現御神と始て称
奉_ル趣あり其_ハ世_ハ悉く人の世_ハも_レ億人_ニハ

又雄略天皇四十年
御紀一事主神天
皇の御事と申せ
現人之神と申せ
給へり其_ハ餘_ハ
ん其_ハ多_ク語_ヲ
なり其事_ハ古_ク
ハ傳_ヘ三十一_ハ百_ハ現
事顯露の事を
述べて云べき事
あり

變_ハ勝_リて尊_ク高_ク御在_シ坐_ル故_ニ正身_ハ人_ニありて御
在_シ坐_ルとも天神の御許より顯_ハれ出_サせ給へり
大御神ありて渡_リて給ふ由あり景行天皇四十年御紀
小島津神国津神の日本武尊を望_ミ御拜奉りて仰視_シ君
容_ヲ於_テ人倫若神之字欲_ク知_ル姓名對之日吾是現人神之
子也_ニ有_リ問對_リ言を以_テ味_ハふ可_ク即現御神ハ現
人神ありて渡_リて給へり證_{アリ}此_ハ祝詞の舊_ク訓_ハ
現事を阿良比登基登_リ有_リ己_レの管家名義故_ニ出_サす
る事あり其_ハ現人事_ニ云_フ事ありて天皇の八十魂神
を治奉りて天下を御めさせ給ふ大御政を申奉_ルる

あり又顯事を舊訓の阿佐良米基登名義抄の阿佐良
米基登と訓るハ明アキラメエト所見事又鮮アガラ所見事あり右の幽事
の反對あり人の上の大御政を申奉りあるありハ幽顯カミトヒト
の界此の於て判然チハシあり立て全く人の世の顯國ハ成
りてとも猶天皇尊の可畏き御上をバ現御神とも現
人神とも稱奉り又天神御子とも稱奉り事ハ古の常
ありて万葉の頃項明津神とも遠津神とも常々申奉り
事あり有けりハ天地の依合の極に如此く世ハ人世
不在ありハ天皇御孫尊ハ常在ハ現人神ハ御在ハ坐
す御事を忘れ奉り可うとす又後ハ八省百官を置せ

之て長官次官判官主典と云ふ其長官を加美と云ハ
其上ハ立つ事の謂のミハ非ハ天皇ハ神ありて御在
坐あり出たり可し又位階と云事も出来て一位二
位あり云ハ一ハ座ハ居ニハ座ハ居と云由以て久良
葦ハ云事あるが皇御孫尊の大御座所を天津高御
座と申奉り其の對へて臣下の着べき席を定め
り同トる諸神武天皇御紀ハ頭ハ頭鳥を遣ハして虜
共を徴徴さしめ給ふ所ハ鳥到其宮而鳴之曰天神子召
汝怡時過怡時過兄磯城念之曰聞天壓神至而吾為慨
憤時奈何鳥若此惡鳴耶云二次到弟磯城宅而鳴之
曰天神子召汝怡時過怡時過弟磯城懽然改容曰臣
聞天壓神至且夕畏懼善乎鳥汝鳴之若此者歎下之有
て此方ありハ天神子と名乗るせりハ彼方あり畏懼

こて天壓神と稱奉りる意ハ此より以前ハ乃運神集
於冲衿曰略皆負日神之威隨影壓躡如此則曾不血刃
虜必自敗矣と雄詰詰び為させ給ふハ如く其御勢實ハ
當り可うござる御有狀を申奉りるあり又是其大御
稜威を畏り奉りて申を申せざるあり景行天皇四十年
御紀ハ天皇日本武尊ハ東征の御事を仰給へる所ハ
今朕察汝為人也身體長大容姿端正力能扛鼎猛如雷
電所向無前カキ所攻必勝即知之形則我子實則神人是定
天聰朕不敵且国不平今經綸天業不絶宗廟子と有ハ
御形ハ我子ありて人体ハ御在り坐せども身實ハ

天業を經綸めハ天神の現ハ御在り坐るると稱譽させ給へるありて現人神の意あり又右ハ引り島津神国
津神の望拜こて仰視君容秀於人倫若神之乎と申せ
るハ吾是現人神之子也と對へさせ給ひて御父天皇
の御事を現人神と申させ給へり又神功皇后御紀征
韓の御政の所ハ新羅王曰吾聞東有神国謂日本亦有
聖王謂天皇必其国之神兵也豈可考兵以距乎云こて
有て国を神国と云ハ天皇の御軍を神兵と云て戦ハずして懼
畏り奉りるあり古事記朝倉宮殿ハ後更亦幸行吉
野之時雷其童女之所遇於其處立大御吳床而坐其御

吳床彈御琴令為儻其孃子云二其歌曰阿具良章能加
 微能美且母知此久許登尔麻比復流袁美那登許余尔
 母加母之有之此の天皇大御自の御手を神の御手
 之入詠せ給へりき此を以て天皇尊等の御上
 も御形ハ人ハこ子御在し坐けれ其身實ハ神とも神
 と實ハ天神御子の現人神ハ渡りせ給へる御事を曉
 り明し玉可くあ玉有ける應神天皇十三御紀ハ大
勲獨對髮長媛歌之曰弥知能之利古破儂鳩等綿鳩伽
未能語等知虚也注せ其始ハ天皇遣專使以徵髮長
を疾ハ如神也天皇カ娶させ御在し坐玉とて召上さ
媛之有ハ如く天皇カ娶させ御在し坐玉とて召上さ
ハ給へるを以て如神とハ詠給へるあり是みと神

之ハ其界の別あり也又其雄略天皇四年御紀ハ春二
云称ありを知る可し
 月天皇射獵於菖城山忽見長人來丹望丹谷面貌容儀
 相似天皇天皇知是神猶故問曰何處公也長人對曰現
 人之神先輔王諱然後應尊天皇答曰朕是幼武尊也長
 人次称曰僕是一事主神也遂共盤カリスミテラ于遊田駟逐一鹿相
 辞祭箭並擣馳騁言詞恭恪有若逢仙於是日晚田罷神
 侍送天皇至来目水是時百姓咸言有德天皇也之所見
 たる如く神ハ本より天皇の御事を知奉りせ給ひあ
 がる御名を宣はさせ奉り玉とて現人之神先称王諱
 と申させ給へり此御事を古事記ハ又一時天皇登

幸葛城山之時云二有其自所向之山尾登山上人既等
天皇之鹵簿亦其裝束之状及人衆相似不傾尔天皇望
令問曰云故天皇亦問曰然云云於是答曰吾先見問故
吾先名告吾者雖惡事而一言雖善事而一言言離之神
葛城之一言主大神者也天皇於是惶畏而白恐我大神
有宇都志意美者不觉白而大御刀及弓矢始而脱百官
人等所服之衣服以献尔其一言主大神手打受其捧物
故天皇之還幸特其大神滿山末於長谷山口送奉之所
見乃此御父大國主神と共八十隈の隱させ御
在坐ける事を豫て所知食が故に顯御身坐むとい

思ひ係させ給ひざり御事あり故に惶畏もせ
給へり是神の隱身御在坐す謂を知り又顯
身の中めても天皇尊は現人神めて渡らせ給へ
御事を明め奉る可き證あり此の現人之神も有
世人共あり然申
奉り非ざ一奉主大神の天皇尊を指して然申させ
給へり御言あり是を以て吾輩凡人の然仰ぎ奉る
御子にて現人之神の渡らせ給ふが故に然宣ふ常
の事ありて見ゆ御事あり右の如く神の常の隱身の
余有て甚き畏御事あり
御在坐故に邂逅御身を現し給へり其の
就て現人神と申奉る御事あり万葉六三十一住吉乃
荒人神船舳尔牛吐賜又拾遺集意四住吉の現人

〇と見え播磨國
記云賀茂郡河内
里中右由河為名
此里之田不敷草
不苗子所以然者
任古大神坐之
時食於此村亦從
神等入前田草
解散為坐亦時
草立大馬許於
大神判云田田苗
者必雖不敷草如
敷草生故且村
田于今不敷草作
苗代と有之此時
の御事ありて即

神山誓ひて忘れ君心と聞くと神中秘事天降り現人神の相生を思ふ攝云々有て任古神を然申せる事、撰
津風土記の所以称任古者首息長帶足比賣天皇世任
吉大神現出而巡行天下覓可任國時到於沼名標之長
國之前乃謂斯實可任之國遂讚稱之云真任吉之國乃
定神社今俗略之直稱須美乃敷令有か如く現御身を
現ハ一御在一坐之宮處求ハ天下を巡レセ給ヒ一奉
の御在一坐けるハ故ハ現人神神ハ申奉り奉る有り後
拾遺集雜三ハ天皇ハ現人神ハ和玉迄鳴ける杜の郭
公哉と詠る此ハ八幡宮ハての歌あるハ其大神ハ一
も輕島明宮ハ大坐て天下所知食ハ天皇ハ御在

又續詞花集
北野ハ寄奉る歌
思出つや無き名
と立ハ高愛りき
と現人神ハ有ハ
昔と有ハ本ハ現
人ハ一ハ神ハ成
せ給へる謂ハ大
鏡ハ一夜の中ハ北野
ハ莫許の松を令生
給ひて遷任給ふ
とハ唯今の北野宮
と申して現人神ハ
御在ハ坐めれと有ハ
△古事記白檮原宮
事許多見えたる
其神代の事ハ
ハ補て人世成て
多うり其三を云
ハ又真教ハ現人
神ハ地祖と云ハ
を現人神と云ハ
ハ云ハ地祖ハ
皆此國ハ形有ハ
神ハ如何ハ謂
ハれハ事ハ非
任せたる林ハ非

坐せハ本より然ハ詠ハ可き事ありハ一儲任吉大神
を現人神ハ申奉り奉るハ神ハ常ハ隱身ハ御在ハ坐
ハ故ハ稀ニハも然ハ事ハ御在ハ坐せハ然申せる古
の習俗ありハありけりハ万葉ハ荒字を畫るハ借字ハ
現人神ハ和玉迄云ハ云ハ本より其心ありハ右の
事ありハ詠物ありハ抱ハ云ハ云ハ統ハ荒字の意ハ見
事ありハ又古事記白檮原宮故如此言ハ向平和荒夫
琉神等退撥不伏人等而坐畝火之白檮原宮治天下也
又見えたる荒布流神ハ云ハ御紀ハ天皇獨進進典皇子
午研耳命帥軍而進至熊野荒坂津亦名丹敷浦因誅丹敷戸
畔者時神吐毒氣人物咸瘳ハ有ハ此あり記ハ此時熊

野之高倉下^齋一橫刀到於天神御子之伏地而獻之時
天神御子即寤起詔長寢乎故受取其橫刀之時其熊野
山之荒神自皆為切仆尔其惑^或伏御軍悉寤起之有
此等を云あり又日代宮段の小碓命者平東西之荒神
及不伏人等也^有西の荒神ハ其熊襲を言向小御
在し坐たる所小山神河神及穴戸神皆言向和而參上
見元御紀ハ既而從海路還傳到吉備以渡穴海其處
有惡神則殺之亦比至難波殺和濟之惡神^有是亦
り又古事記ハ尔天皇亦頻詔倭建命言向和乎東方十
二道之荒夫瓊神及摩都樓波奴人等^有荒夫瓊神

御紀ハ則日本武尊進入信濃云々食於山中山神令
苦王以化白鹿立於王前王異之以一箇蒜彈白鹿則中
眼而殺之^有有を此を記ハ亦平和山河荒神等而還
上幸時云ニ見えたり又取伊服岐之山神幸行於是
詔茲山神者徒乎^手直取而騰其山之時白猪逢于山邊其
大如牛尔為言^舉拳而詔是化白猪者其神之使者至今不
殺還時將殺而騰坐^騰有を御紀ハ山神化大蛇當道
見ハ此等の山神河神ハ云物ハ神ハ云ハハ甚
ニ微少^イキ神ハ會歎^イルハ靈を託し其体を借て
荒振^イる小鬼ハ其体を斬^イるハ其ハ共ハ亡ぶ者ハ

れども顯身の人てハ異りて神ハき所有を以て神ト
ハ之るあり斯る物ハ神ト云ハ寶劔出現章第二ノ一書
ハ素戔嗚尊勅蛇曰汝是可畏之神敢不饗乎ト有て斯
許り尊キ大神ト云ハ蛇を神ト宣へり欽明天皇御紀
ハ秦大津父ハ事を但臣向伊勢高價来還山有途二狼
相闘汚血乃下馬洗漱口手祈請曰汝是貴神而衆麋行
僮逢獵士見禽尤速乃抑止相闘拭洗血毛遂遣放之俱
令全命ト見元同六年ハ膳臣已提便便ハ子を虎ハ取リ
以たリ所ハ天曉始求有虎連跡臣乃帶刀探甲尋至巖
岫拔刀曰敬受絲綸劬勞陸海櫛風沐雨籍草班荆者為

愛其子令紹父業也惟汝貴神愛子一也今夜見之追跡
覓至不畏亡命欲報故末既而其虎進前開口欲噬巴提
便忽申左手執其虎舌右手刺殺剥取皮還あど有て如
此ハ人の為ハ捕リるハ虎狼をハ神ト云ハ其可畏
キ勢有を以てあり其甚ハきハ至リてハ由レてハ神
東國不盡河邊人大生部多勸祭出於村里之人曰此者
常世神也祭此神者致富與壽巫祝等遂詐託於神語曰
祭常世神大生部多其巫祝等ハ於此是秦造河勝惡ハ民
所惑打大神部多其巫祝等ハ於此是秦造河勝惡ハ民
然レハ神ト氣ハのハ有リ非レハレ鳴キ呼ル者ハ有テ斯ル妖言を
唱ル初メ時ハ所レ得タリト妖鬼のハ靈を託シてハ其祭を享
むカ為シ愈ス其力を添す事ありカ秦河勝の如キ壯夫
有テ此を打討む時ハ其限リハ何レハ立退テ止ム
事ハてハ有リ也ト暫ク時ハ雖モ然レハ奇異ハ事を示ス
すルハ即チ神トあり也斯ル類後世ト成テハ愈多き事

公あり推古天皇三十二年御紀ハ柏杵を
安藝國ハ令伐リる
所ハ有リ日禰屋
木也ハ不可レ伐ル河邊臣
其巫神ト皇上堂
命多祭神ト皇上堂
夫ハ天令伐ル大雨雷
電後河邊臣皇劔
曰ク即チ化ス魚ト以テ
投テ樹枝即チ取ル魚ト
之ト有リ知ル魚ト也
ハハ魚トカレ殺ス也
其命盡スルハ神
の鹿化リ蛇ト也
者ハ前此ハ同シ也

ありて驗の有るも皆然る例あり事此ハ師説の甚
事あり又劔をも玉をも鏡をも物をも神と申す事ハ
其奇異の靈しく歎ある御徳を統へたる者あり古事
記の迦具土神を斬給へる所ハ其所斬之刀名謂天之
尾羽張亦名謂伊都之尾羽張マ有を其国平段ハ於是
天照太御神詔之亦遣易神者吉尔思金神及諸神白之
坐天安河ニ上之天石屋名伊都之尾羽張神是可遣
所見^{唯ハカノ御魂のこゝに御在り坐す}此ハハ己ハ一神ハて御在り坐すハ然御魂
神ハ御在り坐す上ハてハ形体をも自由ハ出来させ
給ふ趣あるも神の神たる所以ハ有ける又御水

滌段ハ此時伊邪那岐命大歡喜詔吾者生^子而於生
終得^{三貴子}即其御頸珠之玉緒世由良途取由良也志
而賜^{天照太御神}而詔之汝命者所知高天原坐事依而
賜也故其御頸珠名謂御倉板拳之神^{有ハ記傳七}
ハ御祖神の賜ハ一重き御宝と為て天照太^御神の御倉
ハ藏め其棚上ハ安置奉りて崇奉給ハ一故の御名ハ
可^ハ云ねたるが如く此ハ唯神^ハ一^ハ崇奉^ハせ
給へる少て別ハ御名を奉^ハせ給へるハ非^ハれども
重^ハく齋祭^ハる物^ハ神^ハと崇^ハめ奉^ハる例あり又傳十九^{二百}
九^{八十}二十^{八十}ハ註^ハせる此^ハ招^ハ宴^ハの御鏡^ハを大倭本記^ハハ一

鏡者天照太神之御靈名天懸太神今伊勢国磯宮崇敬
并太神也一鏡者天照太神之前御靈名国懸太神今紀
伊国名草宮祭敬并太神也之有て一を天懸太神一を
国懸太神と称奉りるあり又古事記白檮原宮段あり
天より降給へる御劔の御事を此刀名云佐士布都神
亦名云瓊布都神亦名布都御魂此刀者坐石上神宮也
之所見たり其を御紀の武甕雷神登謂高倉曰予劔
号曰部靈部靈此云赴有を見り己の其持主之御
在坐す武甕雷神の然號けさせ給へるありけり又
大穀祭詞の天降賜此志食国天下登天津日嗣所知食

須皇御孫之命乃御殿字今奥山乃大岨小岨尔立苗木
字斎部能斎部字以伐操本末山神尔祭氏中间字
持出来氏斎部字以斎柱立氏皇御孫之命乃天之御醫
日之御醫止造奉仁礼瑞之御殿汝屋船命尔天津高護
言字以氏言壽鎮白久云二平久安久奉護苗神御名字
白久屋船久二遲命屋船豊宇気姫命登御名波奉插稱
利氏て見えたり此文の瑞之御殿汝屋船命と有る御殿
の下の字の辞を添訓む其汝辭事ありて字字
無き其御殿を直汝屋船命の御形実と祀祭る申ふ
るめて上件の例共の同トき由己の祝詞講義十卷

堅 稻
 く注せるか如く別
 を以て暮る御殿か取も直さず屋船命を以て造り草
 を云ふ若く其命を是稲也と注せる此二神也
 の古史微み此詞中極堅多智神の幸給子功徳有ハ草
 引結幣魯葛目能緩比取善計魯草乃噪無久有ハ草
 神草野比賣神之幸給子功徳命云云然久有ハ草
 野比賣命云云ずして豊宇氣姫命云云然久有ハ草
 此神実稲敷を成し給へる神云云然久有ハ草
 給へるハ其幸魂の御業有る故ハ此ハ本御霊の御
 名を以て云ふ途命草葉ハ豊宇氣姫命の御霊物あり然
 本より久屋船命と申せるハ其全体の御殿の神名と
 思給て次ハ木と草の事を分云ふ所あり故ハ其
 神二の御名を顕ハ其を想たる屋船故右の如く例
 を以て二ハ冠ふとせ奉れる者あり
 共を多く聚めて説廣むれば未ハ多端ハ成以て行て

上 四百三十ハも粗云るが如く神ハ物の上首として
 四百三十ハも粗云るが如く神ハ物の上首として
 崇めへ尊ふハも神と申し又其徳の重しく奇しく妙
 ありて物思測り及ハざる所をも神と申し又顯身の
 人ハ對へてハ幽りて其形体の見元させ給ハざる上
 をもたて神と申す事ありて死せる人の霊をも神と云
 ふ事あり又劔玉鏡の類をも神と申し其徳有を給へて神
 と申し龍蛇虎狼の類も物ハ勝りて勢猛きを神と
 云事常あり然るを其神と云ふ名義を隱身と云言の
 切れるありむとも云い得云る可き状ありども正し
 く顯身と顯ハれさせ御在し坐すをも神と申すハ其

所より坐りて指支へざる事を得ず故世中の神とも神
と世始より御在り坐し初て天地の中諸神も其元
の元より坐し本の本より御在り坐る掛はくも恐き天之
御中主神と申奉る御在り坐て物も無く事も無く世
涯を盡して唯高天原にて謂ゆる天中の有り神と
申せり唯此大御神の御在り坐る當昔何れ隠れ何
れ顯れ坐りて為む故其義を先此より求む可くある
有ける然れども如微の如く氣ある可く此天中の充塞
りて天地をも覆ひ萬物をも藏めて遺さざる物あり
は此より世も大なる物無く將此より世も奇異ある

所あり坐りける微々^微天之御中主神の御在りて御紀の
皇產靈此云美武須昆と有る美是あり偕其物は何れ
も云ふ其氣の中圓在りて充滿なる精と云物有る故
其御中主と申すも御の精あり中へ成慮あり獨て其
主と御在り坐す謂あるは次の成坐る高皇產靈神
皇產靈神の高は足氣ありて氣の前むあり神の氣聚り
て氣の混沌るあり美の精ありて右に云る御中主の御
是あり武須昆の結聚めて一物と成り給ひ此を天地
と成り萬物と成り給ふ謂あり故其世中の涯際も唯
氣のあり其氣中を總めて唯精の有り然れども如

微と申す時の天地をも萬物をも包藏めて世中を惣
合せたる神ありて有けれは此ハ実ハ天之御中主神
一柱ハ限たる神ありて世中の極際ハ其神の隱
身の御在し坐す正身ありて落る隈無く漏る隈無く
充塞し御在し坐す即其迦微ハ渡り世給ひける
自餘の諸神ハ神と申すハ此ハ出たる者ハ其本一
あり故其天之御中主神ハ世中ハ在と有ゆる神
の初ありて至尊御在し坐す則を取て物の始を上
と云ひ其上ハ在て至尊ハ神靈を神と云あり又其
神の御徳の妙ハ高し大坐して心も詞も及び絶た

る御事あるを以て然る類の事ハ神と云り又常在ハ
隱身ハ御在し坐すを以て顯身ハ對へて然る見え難
きハ神と申せるあり皆此天之御中主神一神ハ出来
りる神ありて有ける猶三卷四下ハ云る説共を考合
す可き者あり然れども此ハ餘りハ幽深くして微妙
難き事共ありて右ハ如く古書ハ在る限り説を考
げて其中ハ得有る如く神隱ありて生れ出ると説を註
さずして思ひ限りて心行くハ任せ筆の運ふハ隨
ひて書出る者あり此當否ハ神備の右の如く云にて
ハ神ハ靈の方ハ多く云ひ人ハ形体の有ハ云事ハ
るハ上二下ハ註るか如く伊弉諾伊弉册二神ハ

も隱身より出させ御在り坐て初て顯身と成り世給
入りけり人の始と申さむも強言の非るあり備
比登と云名義は日文の一を比と云ひ十を登と云る
其比ハ傳三六丁の註せるが如く合めて天地萬物を
總合せて一あり此を伸する時ハ十と成るるを百千
萬と數の衍ゆるも其十數より割り延ひりたり者亦
水の數の始ハ一あり起りて數の終ハ十あり止る事ある
が故の鎮魂歌あり此十を多理と云り其二十を聯ね
て比登と云と云むも亦強説の非る可し備比を合
の義ありと云ハ如何と云ハ大同類聚方第ニ章の比

登乃美乃奈連流半自免波安萬都美他麻美豆保乃計
乃不多通予加渡世保豆祢奈理知之保奈利士二奈利
須知奈利保念奈利南訶味多奈理典通依大奈利訶波
奈利波奈二利久知那利萬那古那理美味阿奈二利加
美介奈利遊毘奈利都萬念奈流と有て天地の初時の
消息の異ありず其天津靈を姑く天御中主尊の當り
次ハ水火氣の二を交合すハ高皇產靈尊神皇產靈尊
の御所為あり其保豆祢ハ狀貌難言と有る一物あり
浮膏あり血液ハ海あり肉ハ国土あり骨ハ天柱あり
中藏ハ黃泉あり人も一箇の小天地と云るか如く少

も違ふ所無き者あり偕其人体を成れり此を惣收ハ
氣^キ之^ノ形^{カタ}ヲ^シ神^{カミ}之^ノ三^ミ有^ル事^{コト}上^ウハ^ハ十^{ジュウ}あり次^{ツギ}ニ^ニ辨^{ワカ}た^ルガ
如^カき^カ又^{マタ}此^{コノ}を^ヲ分^ワけ^テハ^ハ風^{カゼ}火^ヒ金^{カネ}水^{ミヅ}土^{ツチ}の^ノ五^イありて^テ風^{カゼ}ハ^ハ氣^キを
り^リ火^ヒハ^ハ神^{カミ}あり^リ金^{カネ}ハ^ハ骨^{ハネ}幹^{カネ}水^{ミヅ}ハ^ハ津^ツ液^{エキ}土^{ツチ}ハ^ハ皮^{クニ}肉^{ニク}あり^リて^テ此
五^イの中^ノの一^{ヒト}を^ヲ缺^{ケツ}く^ク時^{トキ}ハ^ハ身^ミ体^{タマ}を^ヲ有^ル事^{コト}能^スハ^ハさ^スる^者あり
り^リ此^{コノ}五^イ元^{ゲン}神^{カミ}の^ノ相^{アヒ}有^ルた^ルせ^ニ御^{ミコト}在^リ坐^マす^事あり^テを^ヲ以^テ人
の^ノ比^ヒハ^ハ合^アフ^ル云^{ハク}ハ^ハ同^トト^ス云^{ハク}ハ^ハ今^{イマ}云^{ハク}ハ^ハ身^ミを^ヲ美^ミ
云^{ハク}ハ^ハ聚^クの^ノ義^イあり^テ比^ヒの^ノ合^アフ^ル事^{コト}一^{ヒト}可^ク上^ウ百^{ヒャク}
十五^{ジュウゴ}あり引^ヒる^事天^{アメ}孫^{ムコ}降^ク臨^ス章^マ第^{ダイ}四^シノ^ノ書^{シヨ}ハ^ハ大^{ダイ}伴^{バン}連^{レン}遠^{エン}祖^ソ天^{アメ}忍^ニ
日^ヒ命^{ノミコト}の^ノ御^{ミコト}名^ナ出^デた^ルを^ヲ姓^{セイ}氏^シ録^{ロク}左^サ京^{キョウ}神^{カミ}別^{ワケ}ハ^ハ佐^サ伯^{ハク}宿^{シュク}祖^ソ大^{ダイ}
中^{チュウ}天^{アメ}神^{カミ}

伴宿祢同祖有を其^{右京神別}佐伯造天雷神孫天押
人命之後也^{上天神}見元たるを以て天忍日命ハ天忍人命
の義ヲ聞内^{右京神別}比^ヒの^ノ合^アフ^ル事^{コト}一^{ヒト}可^ク上^ウ百^{ヒャク}
り^リけ^テ然^シ水^{ミヅ}ハ^ハ神^{カミ}名^ナあり^テ多^ク某^{ナニ}日^ヒ命^{ノミコト}と^シ云^{ハク}ハ^ハ某^{ナニ}人^{ヒト}命^{ノミコト}之^ノ
申^{ウケ}さ^スむ^カが^カ如^シク^ニ其^{ソノ}顯^シ身^ミ御^{ミコト}在^リ坐^マす^事能^スハ^ハさ^スる^者あり
マ^シ聞^クゆ^ヘの^ノり^リ其^{ソノ}大^{ダイ}直^{チキ}日^ヒ神^{カミ}あり^テ其^{ソノ}同^ト時^{トキ}ハ^ハ成^ス坐^マ
る^事神^{カミ}ハ^ハ底^{ソコ}筒^{ツツ}男^ヲ命^{ノミコト}中^{ナカ}筒^{ツツ}男^ヲ命^{ノミコト}表^{ウラ}筒^{ツツ}男^ヲ命^{ノミコト}又^{マタ}ハ^ハ伊^イ豆^{マメ}能^ス賣^ル神^{カミ}
あり^テも^モ男^ヲ女^メを^ヲ以^テて^テ御^{ミコト}名^ナハ^ハ添^ソた^ルを^ヲ以^テて^テ見^ミゆ^ヘハ^ハ日^ヒと
云^{ハク}ハ^ハ人^{ヒト}の^ノ意^イあり^テ添^ソり^テ登^{ノボ}る^事多^ク理^リあり^テ云^{ハク}ハ^ハ足^{タラシ}
り^リけ^テむ^カ事^{コト}も^モ知^ルる^事あり^テ云^{ハク}ハ^ハ義^イあり^テ説^スる^事ハ^ハ傳^{デン}五^イ十^{ジュウ}あり^テ証^{シヨ}面^{オモテ}足^{タラシ}尊^{ソノ}と^シ申^{ウケ}奉^ルり^リ
始^{ハジ}て^テ御^{ミコト}形^{カタ}体^{タマ}の^ノ足^{タラシ}具^グの^ノ備^ビハ^ハ給^{ケル}ふ^事義^イの^ノ御^{ミコト}名^ナあり

私記の人形未必具足而此至于此神人形漸具顔面足
成故謂之面足也面足者人面漸滿足之義也形質已具
可謂太極也オホキリヒト有是是を云あり故子を長すを養ふ云
ハ日足の義ある事傳十五三百の注るか如く又人を
計ふるハ一人二人と云ハ一足二足と云事と云ハ異
るくす然れば天足彦神人目押年日本足彦国押人天皇亦
と稱奉る御名の足も御面の足ハ一坐る義を以てあ
る可一万葉二四十の天地日月典滿將行神乃御面跡
云二九三十の望月之滿有面輪二あると見え又二二十
ハ天原振放見者大王乃壽者長久天足有るも御面

万葉三行の今
字の二つ用ひて
訓を合せて思
ふべき者あり

の満足ハ一坐るハ依て御壽の常一御在ハ坐む事
を祝奉るせ給へり見ゆ若て人の比ハ合の義ありて
然云ても其事と成るを登も亦足の義ありて身体を云
称あるを合せて比登之云語と成れる者ありけり先亮
ハ人の比ハ産靈を武須昆と訓る比ありて靈字の義
あり可く登ハ本より足ありけりハ靈足の意あり可
中ハ其ハ鹿シカ言ひて我ありて心耻りし心
ちる○多ハ四神出生章ハ吾息難多と有る下ハ傳ハ
四下ハ云るか此ハ人難多請と有る統の人多きハ神武天皇
御紀ハ道臣命乃起而歌之曰於佐箇忍坂於明務露室屋夜珥
比苦タタ破タタ而異離鳥利鳥居若毛比苦タタ破タタ而伊離鳥利鳥居若

毛云二此を古事記のハ大御歌と一之意佐加能意富
年盧夜尔比登佐波尔岐伊理袁理比登佐波尔伊理袁
理登女云云有子此即人多小例有崇神天皇六
十年御紀の柳句毛多兔伊頭毛多鷄流餓波鷄流多知
菟頭羅佐波磨紀佐微那辞珥阿波礼有子此を古事
記日代宮殿のハ倭建命の御歌と一て田句都豆良佐
波麻岐有子右の同ト万葉一十八の国者思毛澤二
虽有三八丁の高山者左波尔虽有五丁十人佐播尔
滿互播阿礼等母云二天下奏多麻比志家子等撰多麻
比天六丁六の鰻珠左磐尔潜出又三丁十国者霜多虽有

里者霜澤尔虽有十丁十六の梅花令散春雨多零十七
丁九の夜麻波之母之自尔安礼登毛加波二之母佐波尔
由氣等毛又五丁十野毛佐波尔等里須太家里等二十三
丁七の若草之都麻母古騰母毛乎知已知尔左波尔可久
美為あが猶多うり五卷ありの多りの中より撰出
澤を對へ云以十七卷ありの纂を並べたり
其沢も潤沢の沢字あり有けり然る義をも包たれ
字多あり○請ハ麻衣須あり珠盟約章は於是素戔鳴
尊請曰有子下傳十五丁五の註了ら如し若し此を
神功皇后御紀の皇后選吉日入南宮親為神主云二而
請日先日敬天皇者誰神也願欲知其名有下あり

願字ハ見合す可き所有故ハ請曰を泥疑麻表佐久
ト訓り此次ハ言之麗美ト有言ハ謂ゆる大祝詞言
あるハ古事記ハ布刀詔戸言禱白而ト所見たる統き
を思へハ此の請字をも禱白の如く訓て人^難多請を
人多尔泥疑麻表世掃毛ト説む高む甚能相悞ひて聞
ゆある名義抄ハハ請字泥賀布ト有ハ但本の任ハ麻
禱^白曰ト同ト意あるハ上ハ言の統きも猶其方勝りト
思ゆハハ訓をバ改めずト虽も意ハ其如くハ有ハ
更事云も○未ハ己の及あり口訣ハ不今也將来之言
ト有ハ如ク神世七代章ハ天地未割其第五一書ハ天
地未生ト有ハ天地已割又天地已生ハ對言あるハ

り四神出生章ハ未^有若此靈異之見ト有ハ己ハ若此
靈異の兎御在^坐を以あり是時天地未遠ト有ハ
天地已遠放ゆる後あり其然^未ざりト時を云あり此
ハ味^未有若此言之麗美者也ト詔給へるハ上ハ人^難多
請ト有る人字の上ハ己字ト有る意ハ己ハ諸神の
請せる言麗美ト^未ず今天兎屋命ハ廣厚ク稱辭竟
ハ祈啓さる^未言の麗美ト聞食^未愛させ給へる趣
ハて大ハ味有る事ハあり伊麻陀を右ハ不今也ト注
不字の意ハ那^未あるを連^未色ハ依^未陀ト云ハ有^未
む借^未末の言を上ハ置^未く時^未ハ下ハ必^未不^未の意ハ受^未ト訓
べきを然^未ぬハ^未異^未古事記ハ千矛神の御歌ハ多知
あり次ハ云へ^未あり

古事記明皇
元子者既成人是
無能弟子者未
又是愛^未有^未既
未^未を對^未たり有
あるハ思合す可

今又江三雪漫未
冬鴨

賀遠母伊麻陀登加受且淤須比遠母伊麻陀登加泥婆
不見元次カウ其沼河比賣米開戸自内歌曰云二故其
夜者不合而明日夜為御合也合有也其夜者未合而明
夜已合也の義ある事右の如し又同下未の言ある
一種別あるも有り万葉四五十乃若木乃梅毛未含有
七十九乃赤石門浪未佐知有又五十木末之於者未辭
之又五十片枝者未含有九十乃三和山者未含有十九
見雪者未冬有十一四十乃三島管末苗在十八十六乃
佐具良波奈伊麻太敷布賣利二十五十乃都奇餘米婆
伊麻太冬奈里古今集乃梅枝乃未居る鶯春係て鳴け

今又今朝未鳴
旅ある時鳥死瑞
の若借る意

△様あるが極考系
此も上の同例也と言
外ハ不の言の廣に
るある可し右の若
乃梅毛未含有の下ハ
嘆むしとせず赤石門
浪未佐知有の下ハ
渡りしなりとの如し
詞の略るるも有
べし又ハ

とも未雪ハ降つゝあると有ハ右の未不と之例ありとハ異
あて俗ハ麻陀と云ハ同ト万葉十二三十乃今夕彈速速
初夜徒緩解我妹と有る速速又ハ古今集乃五月来来ハ鳴
きも舊舊ある時鳥麻陀し程の色を聞りハやと有る
麻陀しさの類あり或説ハ右等の未を今將ハ略も
も猶外ハ意有べし漢文の猶字の義ありとも云ハ
りも未慥ハ思得たる説無ハ例のをを出す者ハ
り○言ハ記傳ハ許登と訓て引りハるハ徒子可し此
言ハ云ハ右ハ廣厚祿辞祈啓集と有ハて第二一書ハ
天兒屋命則以神祝祝之と有る是あり口訣ハ神祝
之祝詞也と註して傳二十三百十乃云るが如し又古

事記の、此を天兒屋命布刀詔戸言禱白而見えたる
此等を合せて此の言と云、其太祝詞言ある事を
曉る可し上五百二十の正書、天兒屋命太玉命の相典
其祈禱焉有か如く二神共祈禱り奉らせ給へる
事ありとも天太玉命、幣帛を捧奉らせ給ふ方を主
として其の就て其稱讃を申させ給へるのこころ有
けり打任せて其御祈の祝詞を申給へる、天兒屋命
の御在し坐す故、此事の依て其神の亦名を太祝詞
命と負はせさせ御在し坐たりけり、神名帳頭註に
左京二條太詔戸命神本社和及添上郡對馬下縣郡天

兒屋命也、有る是あり神祇令、其祈年月次祭者百
官集神祇官中臣宣祝詞忌部班幣帛又九踐祚之日中
臣奏天神之壽詞忌部上神璽之鏡劔と見え祝詞式に
九祭祀祝詞者御殿御川等祭齋部氏祝詞以外諸祭中
臣氏祝詞とも有て天地の共易る可く、御式と成
りるを以ても寔に天兒屋命即太祝詞命少て御在し
坐す事灼然とあり、右の如く年中諸祭の中、齋部の
詞の、あるか其も他祝詞の様、僅に御殿御門等祭
ある者あり、此の幣戸の前、御事をもち、拾遺の金
太玉命捧持稱讃、有か如く、天兒屋命の神名式、左
京二條坐神社二座、並月次相、太詔戸命神久慈眞智命
管新嘗

○日本書紀傳二十二
○百五十八

神々並び御在し坐す是あり師説の此久慈眞智命を
 も天兒屋命の亦名と定めしむたる海賢實の卓見ありて一
 神の御名の各々の御功の就て称分て二柱と祀り
 者ありけり此時の布刀詔戸言禱白云この御功の依
 て大詔戸命と負坐し又古事記の謂ゆる召天兒屋命
 布刀玉命而内拔天香山之眞男鹿之肩拔而令占右合麻
 迦那波而云々有る此太占の行事の就て久慈眞智
 命と申す御名の御在し坐するあり傳十九百二十思兼神の下引り鹿の起源と云書小
 久志眞智産靈命太祝詞命天兒屋命と有る此二神を別号也
 兼て天兒屋命別号也と註せるあり此を以て師説の

△其相嘗々條
 大詔戸社三座
 坐す有る社名を太
 詔戸社と申せざる
 若し下の奉り大
 和國あり對馬島
 あり共の何座とい
 書はれざれども二
 座を合せて祀り
 事著明し外
 あり

強し水びる事を曉る可くあり有ける奏御下儀の六
 月一日十二月祭下庭神二座料物色目見元其事を
 四時祭式御體御體辞曰於庭神祭二座御下始終
 有る如く二座に分て被祭る事あるが江次勞の御體
 御占神祇官人籠本官迎大詔戸明神と見え古事談六
 小龜甲御占仁波春日南室町西角仁御坐須大詔戸明神
 正申件社字此占乃時波奉念と書し乙唯大詔戸命一
 神を奉りたる其同神あるを以て一座を省き載りれ
 ざるあり清和天皇海賢實錄の貞觀元年正月廿七日甲申
 奉授左京職從五位上大祝詞神久慈眞智神並正五位

上と有て此の二柱の御名を奉^奉られたりとも日
本紀略の延喜三年五月十五日授左京太詔戸神從四
位上兼平元年六月一日丁巳奉授左京正四位上太詔
戸神從三位天慶三年七月五日奉授左京從三位太詔
戸神正三位と三所共の唯一神の御名を出されたり
此御社の事山城志の右三條坊門北坊城東司政所
と云ふ三條坊門の今御地通と云ふ坊城の津福寺町
を云ふ東司政所の東町奉行の邸宅あり其邊の春日
日明神とて古社の御在り坐す是あり古事談の春日
南室町西角と云て已く春日てふ地名の成りも其
天兒屋命を世ふ春日神と申奉りたり其同神の御
在り坐すなり然る小亀北傳とて親小引る小凡^迷龜
出たり可し

警皇親神魯岐神魯美命荒振神者掃平石木草葉斷

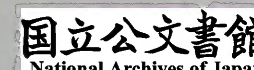
其語詔群神吾皇御孫命者豐葦原水穗国安平知食天
降奉寄之時誰神皇御命朝之御食^{尋常之}長之御食遠
之御食之間^間食大會會昏曉御膳^{御膳也}可仕奉神問^問賜之
時取天香山之白真名鹿^{一説云白}吾將仕奉我之肩骨
内按て出火成下以問之間給之時已致火偽太詔戸命
進啓^{又按時神女住天香山也龜津比}白真名鹿者可知
上国之事何知地下之事吾者能知上国地下天神地祇
况復人情憤悒但手足容貌不同群神故皇御孫命放天
石座別八重雲天降坐立御前降来也云々有て龜ト
祭文あり七九右小同ト云々此ハ甚く異あり傳りて

あて右の如くハ太祝詞命と申すハ亀津比女命と申す神の事ハ右ハ天兒屋命ありと定云ふ説ハ甚く事違ひて聞え又天兒屋命ありぬ神ハ天津詔戸太詔戸命と申す可き謂れ無ハ却た疑ハし事あれハト家ハて出来ハ偽書あり可き事本より論無ト虽も亀トたふ云ハハ漢家より傳ハた者の思ふめ事あれとも傳十九二百四ハ註が如く鹿トハ此磐戸段ハ起り亀トハ御天降の時ハ始りて此ニ共ハ天兒屋命亦名太祝詞命の定させ給ハ御事ありく中古より亀トをのこ主と為る事

成ル其元を尊く為むて終ハ其亀を以て太祝詞命ハ偽造ハ者ありけり又其始て仕奉ル亀ハ信ハ亀津比女神と云けハ然も有ハ住天香山也其所今録天津詔戸太祝戸命云ハ註文ありハ後人推量の説ハて実ハ天兒屋命ハ天津詔戸太詔戸命と申して天香山ハ御在ハ坐を引付た者と所見ハ下ハ但ハ足容貌不同群神故皇御孫命放天石座別ハ重雲天降坐立御前下末也有其龜津比女命云ハ天鈿女命の從神ありて天降ハ給ハ也海中ハ住ハ甲旗ありハ古事記ハ於是送猿田比古神而還到乃悉追聚鱈廣物鱈狹物以問言汝者天神御子仕奉耶之時諸負仕奉白之中海氣不自折天字受賣命謂海氣云此口字不答之口而以折其口故於今海氣口折也是以御世島之速折之時給猿女君等

也^マ有^ルの事ハ此^ノ甚^ク別^ニ有^ル備^傳十九^{二百五}天
 事^{あり}が^く思^合す事^無ク非^ズ有^リ伊^豫風^土記^ハ伊^豫郡^自郡^家
 香山^ノ下^ハ引^リカ^ク如^ク伊^豫風^土記^ハ伊^豫郡^自郡^家
 以^テ東^北在^リ天^山所^名天^山田^者倭^有天^加興^山自^天降^降
 時^二分^而以^片端^者天^降於^倭国^以片^端者^天降^於此^土
 因^謂天^山也^マ有^レを^萬葉^註ハ^阿波^国風^土記^ノ如^クハ
 空^{より}零^降り^{たる}山^ノ大^{あり}ハ^阿波^国ハ^零降^りた
 る^を天^祝詞^山マ^云ハ^其山^ノ碎^{けて}大^和零^落著^た
 る^を天^香山^ト云^々有^レを^所見^{たる}此^ハ天^上有^レ
 天^香山^ノ三^分以^て降^着たる^ハ一^ハ天^山一^ハ天^祝
 詞^山一^ハ天^香山^ト分^云ハ^事有^レとも^天上^有レ^呼

亦^名を^此ハ^各其^一を^以て^山名^マハ^為す^ハて^大和
 ノ^ハも^天祝^詞山^ノ名^有ベ^ク阿^波有^ルハ^も天^香山^ノ
 名^有ベ^キ事^有リ^然云^故ハ^上ハ^註せ^ル如^ク大^詔戸^命
 久^慈眞^智命^を合^{せて}大^詔戸^社マ^甲せ^ルハ^其一^神ノ
 謂^{あり}を^以あ^るハ^神名^式ハ^大和^国十^命郡^天香^山坐
 瑞^眞命^神社^大月^次新^嘗元^名ト^有ハ^神武^天皇^御紀^ハ
 謂^{ゆる}天^香山^社是^{あり}此^神即^或説^ノ如^ク天^兒屋^命
 ハ^御在^レ坐^す時^ハ右^ノ天^祝詞^山大^ハ由^有リ^又龜^兆
 傳^ハ龜^津比^女命^ト云^ハ似^着ハ^レウ^々ざ^りとも^任天
 香^山也^云て^天津^詔乃^大詔^戸命^也を^天兒^屋命^ノ御^事



見^レ時ハ信^ル事^ニ相^シ契^ス合^テ内^ノ御^事ハ
一書且天兒屋命主神事之宗源者也天孫降臨章第ニ
而奉^ル任^ス鳥^ノ有^ル下^ニ其^ノ龜^ノ兆^ヲ傳^ス也故傳又古之
可^シ此^ハ唯^ニ太^ニ祝^ス詞^ノ又^ニ神^ノ名^式大^ニ和^ニ國^ニ添^ス上^ニ郡^ニ太^ニ祝^ス
事^ヲ主^ス也云^ルの^ミ
詞^ニ神^ノ社^ノ新^ニ嘗^ス有^ルを^レ兼^シ似^ス本^ノ書^ヲ入^ル天^ノ兒^ノ屋^ノ命^也
ハ上^ノ引^ル頭^ノ註^ス右^ニ京^ニ二^ニ條^ニ太^ニ詔^ス戸^ノ命^神本^ノ社^和加^添
上^ニ郡^對易^下縣^郡天^ノ兒^ノ屋^ノ命^也有^ル合^ル此^ノ文^ハ依^ル
上^ニ有^ル左^ニ京^ニ二^ニ條^ニ社^ハ此^ノ本^ノ社^添上^ニ郡^ノ御^在坐^ス
て^レ譬^ハハ^ハ鹿^ノ島^香取^平國^等神^ヲ春^日祭^ルれ^今本
久^度古^開神^等を^レ平^野祭^ルせ^るも^レ等^しり^り
ぬ^可き^御事^{あり}然^ル此^ノ神^ハも^レ太^古ノ^御事^就

て京中御在坐させ奉るすて其便り思きか故
の勸請奉らせ給へるありけり備此社ハ大月次新嘗
も有て並この御神ハ御在坐さる古より一度
めて神階を奉らせ給へり御事ノ所見さる甚不
審しき就て思ふ春日祭詞講義ハ己の註るか如
く彼社を定奉らせ給へる後ハ鹿島香取平國等へ
奉らせ給ふ其神階をも春日祭神社に奉らせ給ひし
其を本社ノ神階と爲したる例も同く此も左京
二條社あり貞觀元年の正五位上より始て天慶二年
の聖りて己の正三位に進ませ御在坐けるありけ

り備此御社ハ然許り止事無き御社ありて御在り坐を
大知志ハ在所未詳と有ハ其甚^甚一とて年頃考つる事
あるガ今一の據を得たり奥義抄ハ公家^{亀下の}御占と云
事有りト部氏者朱櫻木ありて亀甲を灼て占ありあり
云と笛吹社ありハ朱櫻木を伐て都々奉ぬれハ神司
亀のト為ハ事あり侍りけり^{兼僕本ハ穴咋と作}と有ハ神名式
ハ同郡穴次神社と有ハ舊訓阿那都伎又布惠布伎^ハ
ととも有より誤れり^ハて此社地あり令採り^ハり
とむが其ハ景行天皇五十五年御紀ハ謂ゆる春日穴
咋邑是ありとむと思ゆれハ穴次ハ穴咋ありて有べきガ

何れありても穴ハ太古の町形と聞え^ス穴^ハも^ハ咋^ハ
とも其を穿り義ありと思しけりハ右の久慈眞智命
あり御在り坐りむも知べり^ハ故太祝司神社穴次
神社一所あり並坐りてを以て其境内あり朱櫻を令採り
りて御卜あり用ひさせ給へり^ハ然れハ奥義抄
あり此社を誤りて笛吹社と云るありけり或人春
日社記ハ謂ゆる穴栗明神ハ此穴次神社と云り御
紀ハ考覈又檢覈を阿那具流と訓れたりハ太古の事
あり愈由有り備此御社今も古市村の西方あり立せ御在
り坐り^ハ但春日社記ハ穴栗明神をハ社記ハ舞殿東と
有りハ其所在違へりハ似たりと雖も古市ハ

南方の一里許も隔れ、其遙宮を構りて此に祭り
し、其有ハ一儲神名式を見る、其神一和坐赤坂比
古神社二穴次神社三知所神社四奈良都比
古神社五穴次神社六高橋神社七其奈良市
此も今奈良村有テ今擇本云邊あり奈良豆比
古神社、奈良村有テ今擇本云邊あり奈良豆比
別あり、西南在リ、高橋神社、八條村、何有テ奈
良あり、西南在リ、高橋神社、八條村、何有テ奈
坐ける御社の絶竟へくも非、此の穴次神社
同地、御在、坐ける、後、一、成、右、穴次神社
安政元年十月、北浦為政、云、其古市人、案内せ
る、以、詣、奉、り、つ、る、其、時、の、斯、る、事、あ、る、思、ひ、も
寄、り、り、故、の、慥、の、思、え、ぬ、又、神、名、式、の、出、雲、国、意
宇郡能利刀神社、今本、能を熊、誤、り、とも、風土記
小詔門社、有、依、て、其、誤、ある、事、著、け、り、今、改、て、引

つ其由未、今知る可う、さ、り、も、天孫降臨章第二
書ある大物主神の帰順ハ、世給へる所、天児屋命を
故、俾、以、太、古、之、下、事、而、奉、仕、焉、有、あ、る、の、由、も、也、依
る、玉、傳、無、り、知、り、難、し、此、社、大、草、御、日、吉、村、の、御、在
坐、て、劔、山、大、明、神、と、申、す、と、云、り、又、神、名、式、の、對、馬、島
上縣郡能理刀神社、清和天皇、實録、貞觀十二年三月
授、對、馬、島、無、位、能、理、刀、神、從、五、位、下、所、見、たり、津
島記事、云、物、の、上、縣、郡、豐、崎、郷、西、泊、村、神、社、云、能、理、刀
神、社、所、祭、三、座、宇、麻、志、摩、治、命、天、兒、屋、命、烏、賊、津、臣、命、或
云、健、男、霜、凝、神、今、称、熊、野、權、現、蓋、龜、下、所、神、即、延、喜、式、神

名帳所載也相傳有老人夫婦者棄彥神於舩至隣濱在村
西造殿留居區有^二搜樹謂之衣掛後^三遷今地云二日未出
時隣濱老翁紅袍^具一帽出遊觀者皆死里人相傳彥未
明出行^マ有り此三座の中あ^三天兒屋命即太祝詞命
の御在^一坐す事上^二云^三了^四が如^五其宇麻志麻治^六命ハ
久慈眞智命の訛傳あ^七むう^八とも思ひ^九し^{一〇}る^{一一}也式外
の同郡佐護御患古村神社云熊野權現所祭三座宇麻
志摩治^治命天兒屋命雷大臣命云^二れ^三の宇麻志^ハ稱名
摩治^治ハ所^二あ^三て^四太兆^ハの事^五ふ^六由^七有^八る^九御名^{一〇}と^{一一}聞^{一二}ゆ^{一三}此雷大
臣命ハ仲哀天皇九年御紀^ハ見^二え^三たる^四中臣烏賊津連

小坐せ^ハ本^二あり^三龜^四ト^五由^六功^七有^八る^九神^{一〇}ハ^{一一}坐^{一二}り^{一三}右^{一四}ハ^{一五}老^{一六}翁^{一七}
出遊^マ有^二ハ^三當^四社^五の^六神^七ハ^八御^九在^{一〇}し^{一一}坐^{一二}る^{一三}玉^{一四}ハ^{一五}貞^{一六}觀^{一七}十^{一八}二^{一九}年^{二〇}
の^{二一}從^{二二}五^{二三}位^{二四}下^{二五}の^{二六}渡^{二七}り^{二八}給^{二九}ふ^{三〇}故^{三一}ハ^{三二}其^{三三}衣^{三四}袍^{三五}を^{三六}用^{三七}ひ^{三八}させ^{三九}
給^{四〇}ふ^{四一}あり^{四二}可^{四三}し^{四四}幽^{四五}冥^{四六}の^{四七}神^{四八}と^{四九}申^{五〇}せ^{五一}ども^{五二}顯^{五三}明^{五四}あり^{五五}御^{五六}位^{五七}を^{五八}
奉^{五九}り^{六〇}給^{六一}ふ^{六二}上^{六三}ハ^{六四}其^{六五}御^{六六}定^{六七}の^{六八}任^{六九}ハ^{七〇}旋^{七一}させ^{七二}給^{七三}ふ^{七四}御^{七五}事^{七六}
と^{七七}伺^{七八}ハ^{七九}此^{八〇}事^{八一}あり^{八二}心^{八三}得^{八四}又^{八五}神^{八六}名^{八七}式^{八八}ハ^{八九}對^{九〇}馬^{九一}島^{九二}下^{九三}縣^{九四}郡^{九五}大^{九六}祝^{九七}
詞^{九八}神^{九九}社^{一〇〇}大^{一〇一}神^{一〇二}清^{一〇三}和^{一〇四}天^{一〇五}皇^{一〇六}實^{一〇七}錄^{一〇八}ハ^{一〇九}貞^{一一〇}觀^{一一一}十^{一一二}二^{一一三}年^{一一四}三^{一一五}月^{一一六}
對^{一一七}馬^{一一八}島^{一一九}從^{一二〇}五^{一二一}位^{一二二}上^{一二三}太^{一二四}祝^{一二五}詞^{一二六}神^{一二七}正^{一二八}五^{一二九}位^{一三〇}下^{一三一}と^{一三二}有^{一三三}る^{一三四}是^{一三五}あり^{一三六}此^{一三七}
袴^{一三八}始^{一三九}ハ^{一四〇}佐^{一四一}須^{一四二}鄉^{一四三}ハ^{一四四}御^{一四五}在^{一四六}し^{一四七}坐^{一四八}し^{一四九}を^{一五〇}今^{一五一}典^{一五二}良^{一五三}鄉^{一五四}加^{一五五}志^{一五六}村^{一五七}ハ^{一五八}御^{一五九}
在^{一六〇}し^{一六一}坐^{一六二}す^{一六三}云^{一六四}り^{一六五}其^{一六六}津^{一六七}島^{一六八}記^{一六九}事^{一七〇}ハ^{一七一}下^{一七二}縣^{一七三}郡^{一七四}典^{一七五}良^{一七六}鄉^{一七七}加^{一七八}志^{一七九}村^{一八〇}神^{一八一}
社^{一八二}云^{一八三}加^{一八四}志^{一八五}大^{一八六}明^{一八七}神^{一八八}社^{一八九}祭^{一九〇}太^{一九一}祝^{一九二}詞^{一九三}命^{一九四}雷^{一九五}大^{一九六}臣^{一九七}命^{一九八}即^{一九九}雷^{二〇〇}大^{二〇一}臣^{二〇二}宮^{二〇三}
趾^{二〇四}也^{二〇五}側^{二〇六}有^{二〇七}壇^{二〇八}域^{二〇九}方^{二一〇}一^{二一一}丈^{二一二}三^{二一三}尺^{二一四}許^{二一五}累^{二一六}石^{二一七}為^{二一八}壇^{二一九}雷^{二二〇}大^{二二一}臣^{二二二}北^{二二三}也^{二二四}大^{二二五}

祝詞神社見延喜式有是あり上縣郡能理刀神社
の祭神天兒屋命坐ある此の太祝詞命と傳
へたる事愈微有り云べし又其佐須郷ある同書
小同郡佐須郷神社云八龍殿神社祭雷大臣命後徒社
於加志村令祭太祝詞神社八龍殿今所謂八神殿卜灼
之所延喜式神名帳所謂雷命神是也云此説の
如く其典良郷坐太祝詞神社八龍殿大臣命の北處
あり就て卜庭神を祀る所ありけり斯の能理
刀神社も此太祝詞神社も太詔戸命久慈眞智命二神
を一座として祭りし者あり然所由同書小同郡

仁位郷仁位村神社云八龍殿社舊号阿惠神社祭雷大
臣命石二寄神社天八龍地八龍蓋龜下所八神殿也社
地曰雷山嶽神社所祭二座雷町命雷大臣命権現以下
四社卜部所祭と有る此の式外社ありとも上ある太
祝詞神社も太祝詞命雷大臣命と有る此の八龍
町命雷大臣命と有る其曰卜龜下就て祭る神も異
有べくも非りけり此を以て翁説の如く太詔戸命
久慈眞智命の共天兒屋命の亦名御在坐す事
愈明りけり事ありけり
右の如く其島小
野権現と申すも字の字近く似たり何れ然

皇本書紀傳二十二
〇百六十七

訛り云るある可し右の云る出雲国の能利刀神社を
熊利刀神社の誤りなるを思ふ可し続紀天應元年七月
中伊賀都臣是中臣遠祖天御中主命二十世之孫意美
佐夜麻之子也伊賀都臣神功皇太后御世使於百濟便娶
被上女生一男名曰本^二麿美^一上^七百五十^下のり云るが
大臣云々に見えたり○麿美ハ上^七百五十^下のり云るが
如く右の廣厚稲肆祈啓^笑と有る言の甚く愛たりり
しを云あり此太詔戸言禱白させ給へるの感けさせ
御在し坐て天照太神の出させ御在し坐す御事成
り其御功の比無く御在し坐り依て太祝詞命と御
名^右の負せさせ給へるあむ少縁の事ハ非りける此
時の大御言の項者人^難多請と詔給へるの合せて此
天兒屋命の稱辭竟奉らせ給へる御事の状を思ふ可

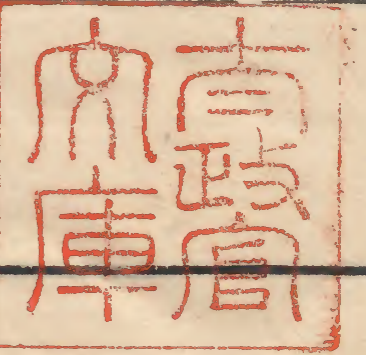
き者あり儲言の麿美と云例ハ古語拾遺ハ大宮齋神
の御事を如今世内侍善言美詞和君臣間令宸襟悅懌
と有る善言美詞と云る是あり万葉四^四十^下の意ニ而
相有時谷愛寸事盡乎四長常思者十六^下の吾皆子之
言愛美出^三去者裳引將知雪勿零あむも有て言の善言
を云あり^{彼巧言令色あむも有て言の善言を巧み仕立て人を}
云^誑續けて^誑言の調ひたる^{記傳八^四十^下の此の文を引て}
あむ麿美ハ有べき^{此時の天兒屋命の禱白し給ひ辭ハ祝詞の始りて甚}
も麿美しうりけむを此の載せず世に傳はるぬハ甚
二遺憾し事ありり一項者人^難多請未有若此言之

麗美者也。有が如く專言辭の麗美しきも感させ給へるあり古語の言靈の幸は子国言靈の助る国と云るも思合されて甚尊しと云れき太玉命の稱讃は拾遺の吾之所捧宝鏡明麗恰如汝命乞開戸而御覽焉と所見たるも天兒屋命の祝詞は此状ゆて極めて麗美しく有け玉を傳今世ののるも甚可惜しき事ありける祝詞式に載れるあども天津神代よりの甚古さる心も詞も及ばぬ迄も美好く麗美しきを况て日神の聞食し愛させ給へる此の稱讃あがも尊しとも高しとも云り得難く有けしと偕又鈴屋大人説大後詞の

礼て祝詞の類は神に申す詞あれは力めて其言を麗美しく為し事あり故古き祝詞共何れも言は甚しく文を成して美好く麗美しく綴りたり其は如何なる故なりと云り大凡人も神も同しく申す事も其詞の麗美しきも感ては受給ふ御心此上無れはあり且も歌ふ神の愛給ふも詞の麗美しきも依てるなり然れは情は如何に深きも悪き歌りの愛給ふ事無し然るを後世人は漢意盛なりて唯理をのみ思ふなり神に申す言も詞を撰撰む者とも思ひたらず等閑のるが為めり神代紀の天照太御神の天石屋の刺隠り

坐し時諸神等云こして中臣遠祖天兒屋命廣厚終辭
祈啓焉干時日神聞之曰頃者人亟多請未有若此言之
麗美者也乃細聞磐戸窺之有を思ふ可し是申す詞
の麗美しきハ感賞給へるハ非ず也然ハ今時自新
ハ綴りて白す詞のこあり古の祝詞を讀申すも
も古の言を過たすカめて其讀を正しくして假ハも
後の音便ハ頼ハなる言あとを交へず清濁あををも
嚴ハ守りて努ニ等閑ハ訓ハ非ずマ懇到ハ論
ハ給へるあむ此故事ハ就ても深く信ハ可ハ説あり
けるハて古ハ常ハ云事をも甚雅正ハ麗美ハ云
ける故ハ神名あどもも薦枕高御産栖日神眞髮

綱高縮田媛命あど申し地名ハ八雲立出雲国栲蓐
新羅國あど云て假初の言語をもカめて言を麗美
く云成して等閑ハ初ハ為りハ事此を以て見る
可し然ハ外ハ漢文ハ多ク書習ハけるハ古の
好し文ハ云ハハ漢文ハ多ク書習ハけるハ古の
雅正ハ文ハ云ハハ漢文ハ多ク書習ハけるハ古の
類又ハ歌詞ハ失ハ行ハ程ハ祝詞宣命の
りハ十年以往ハ世ハ改メテ古言ハ正ハ古意を
得て右ハ如ク言ハ立ハ改メテ古言ハ正ハ古意を
也神ハ等閑ハ神ハ坐ハ大屋大人ハ土人の
大戒ハ風を擬ハて其言行ハ大戒ハ土人の
醜を見ても斯ハ事ハ出来ハ前ハ先禁ハ置れ
しハ思ハ愈ハ益ハ細聞磐戸ハ正書ハ以御
高き傳ハ説ハ所思ハなるハ細聞磐戸ハ正書ハ以御
手細聞磐戸ハ有る下傳十九十四下ハ云ハ窺之ハ
正書拾遺ハ然有リ美曾那波須ハ訓ハ允ハ當り此
所古事記ハ於是天照太御神以為細聞天石屋戸



而内告者因吾隱坐而以爲天原自衛亦葦原中國皆聞
 其何由以天宇受賣者爲樂亦八百萬神諸咲尔天宇受
 賣白言益汝命而貴神坐故歡喜咲樂如此言之間天兒
 屋命布刀玉命指出彼鏡示奉天照太御神之時天照太
 御神逾思高而稍自戸出而臨坐之時其所隱立之天宇
 力男神云ニ有子其文を此中統けて心得べき所を
 事記中傳十九四百七十五丁中註るが如し但其ハ正書の
 ところ有け此より始り天鈿女命の御事を出さ
 りざりけ此ハ正書の例の如し等しうるまじく思ふら
 む人も有あむらひれども其正書の統きも天兒屋命

